

私の研究を振り返る

——同時代史的な検証と自問を通して——

大 門 正 克

はじめに

定年退職にあたり、私の研究を振り返っておきたい¹⁾。定年という年齢の区切りを機会に、長年研究を続けてきた者は、研究をどのように振り返ればいいのか。

この原稿を書いている現時点(2020年1月)で、私自身の研究について自問すれば、「[生存]の歴史学」を提起したことがもっとも大きなこととして思い返される。2008年における「[生存]の歴史学」は、新自由主義時代のもとで、1990年代後半からの10年間に私が進めてきた2つの分野の取り組みの接合をはかり、提起したものであった²⁾。2つの分野とは、歴史批評と農村女性の研究などの歴史研究であり、私の研究についてはじめて同時代史的な検証を試みた。「[生存]の歴史学」は、現在の私の研究の中核にすえているものであり、私にとって大きな意味もっている。ただし、「[生存]の歴史学」を提起した時点で、それ以前の私の研究と「[生存]

の歴史学」の関連についてうまく整理できていない面が残っていると感じており³⁾、研究を振り返るにあたり、そのことが気になっていた。

私の研究を振り返れば、以下の3つの時期に区分できる。＜第1期＞1970年代末～1990年代前半、＜第2期＞1990年代後半～2000年代前半、＜第3期＞2000年代後半～現在（「生存」の歴史学の提起以降）、である。

過去を振り返る自問が現在からの視点のみになってはいけなだろう。同時代史の視点と現在の視点の2つによる検証が必要である。自分自身の同時代史的検証にとって大事なことは、記憶にのみ頼らず、私自身の文章と関連文献をできるだけ多く再読し、同時代史の状況を思い起こして同時代史の視点を得る努力を重ねることである。そこから現在の視点との対比を試みる道が開けるように思う。時代と研究の変貌の同時代史的検証を重ねることが肝要だと思う。

私は、今までも昭和史論争などについて同時代史的検証を試みてきた⁴⁾。研究の紆余曲折の

1) 2019年3月末の定年退職にあたり、私は2回、今までを振り返る機会をもった。ひとつは最終講義であり、2019年1月23日、横浜国立大学経済学部において、最終講義「[生存]の歴史学をめざして——経済史研究とのかかわりで」を行った。これは、横浜国立大学に在籍した18年間における私の教育と研究を振り返ったものである。もうひとつは、比較教育社会史研究会から依頼され、私の研究を振り返ったものであり、2019年5月11日、青山学院大学において、「私の研究を振り返る——自問と同時代史的な検証を通して」と題して話した。以下は、2020年1月の時点で、後者をもとに文章にしたものである。

2) 大門正克「序説「生存」の歴史学——「1930～60年代の日本」と現在との往還を通じて」『歴史学研究』第846号、2008年10月。

3) 大門正克『近代日本と農村社会——農民世界の変容と国家』日本経済評論社、1994年、大門正克『民衆の教育経験——農村と都市の子ども』青木書店、2000年と「[生存]の歴史学」の関連。

4) 大門正克編『昭和史論争を問う——歴史を叙述することの可能性』日本経済評論社、2006年、大門正克「昭和史論争後の遠山茂樹——論争の課題をどのように受け継ごうとしたのか」『歴史学研究』第895号、2012年、大門正克「解題 歴史学研究会の証言を読むために」歴史学研究会編『証言 戦後歴史学への道——歴史学研究会創立80周年記念』青木書店、2012年（のちに、大門正克『日常世界に足場をおく歴史学——新自由主義時代のなかで』本の泉社、2019年、に収録）、大門正克「[中村政則の歴史学]の歴史的位置」浅井良夫ほか編『中村政則の歴史学』日本経済評論社、2018年。

過程に目をこらす必要があり、私の場合、とくに「[生存]の歴史学」の提唱以前の第2期の検証が鍵を握るように思う。先に述べた気になっていることも含め、「自問」「同時代史的検証」「新自由主義」といった言葉を携えて、あらためて私自身の研究の検証に向かいたい。

1 第1期——同時代史的検証と自問——

1970年代末から1990年代前半に至る第1期は、私の研究の出発点にあたる。第1期の研究の同時代史的検証を試みてみたい。

人とかかわる学問を志し、1973年に経済学部に入って歴史を学ぶ選択をした私は⁵⁾、1977年に大学院に進んだとき、1930年代の昭和恐慌対策として政府が実施した農村経済更生運動の研究をめざすようになった⁶⁾。その後、1920年代の農民運動の研究へと領域を拡張した私は、1920年代から30年代に至る時期を、大正デモクラシーから戦時体制への変転としてとらえる問題意識のもと、地域に即した研究を進めた。

歴史研究の方法は、1970年代の人民闘争史研究から80年代に至ると統合論的アプローチへと推移しており、私も統合論的アプローチによる研究をめざした。統合論的アプローチとは、運動との対応関係にあった政策を視野に含め、労働政策・農業政策から男子普通選挙法を含め

5) 大門正克『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波新書、2017年、136～138頁で、経済学部に入學して歴史を学ぼうとしたことにふれた。

6) 森武麿が1971年の歴史学研究会大会現代史部会で農村経済更生運動の報告を行って以来（森武麿「日本ファシズムの形成と農村経済更生運動」別冊特集『世界史認識と人民闘争史研究の課題』青木書店、1971年）、1970年代には農村経済更生運動への関心が高まっていたこと、1975年、経済学部3年生のときに属していた中村政則ゼミナールで農村経済更生運動の調査研究を行ったことから（中村政則ゼミナール3年「養蚕地帯における農村更生運動の展開と構造——長野県上伊那郡南向村の場合」一橋大学学生研究誌『ヘルメス』第27号、1976年）、農村経済更生運動に関心を寄せるようになった。

た支配政策との関係で運動の評価を行うものである⁷⁾。渡辺治、林宥一、安田浩らの各氏によって進められた視角を私もまた共有して研究を進めた。

いま、あらためて第1期の研究を振り返れば、私はとくに以下の3つの関心をふまえて研究に取り組んでいた。1つ目は、現代的関心と歴史研究（学問）の関係に留意することである。1980年代から90年代前半の「経済大国」化により、「現代と近代の距離感」が広がり、「近代と現代の対話が困難な時代」が続くも、近代史研究の意味が不鮮明になってきていると私は受けとめていた⁸⁾。現代を視野に入れた戦間期研究に取り組み、近代史研究の意味を鮮明にする必要があるのではないか、そのような問題関心を携えて戦間期研究に取り組んでいた。

2つ目に、1つ目とかかわり、近代史研究の意味を鮮明にするために全体把握への関心をもっていたことである。当時の私は、農村社会を対象にして、経済的領域・政治的領域・社会的領域の3つの領域から国家と社会の全体把握をめざしていた⁹⁾。全体把握を志すことは、第3期まで貫く問題関心である。

3つ目は議論の拡張をはかったことである。大学院に入った当初から始めた聞き取りのなかで、1980年代後半に入ると、当初の「テーマを聞く」から「人生を聞く」へと関心が広がり、そのことは農村社会や農村における人びとの歴史的理解を深め、広げることにつながった¹⁰⁾。聞き取りのなかで聞いた「講義録」は、農民の教育観や農村における教育の比重を考えることにつながっている。1980年代にかかわっていた新潟県史の編さん事業のなかで、『新潟県史』

7) 大門正克「民衆世界への問いかけ」大門・小野沢あかね編『展望日本歴史二 民衆世界への問いかけ』東京堂出版、2001年、参照（のちに、大門正克『歴史への問い、現在への問い』校倉書房、2008年、に収録）。

8) 前掲、大門『近代日本と農村社会』2～3頁。

9) 同前、7～8頁。

10) 前掲、大門『語る歴史、聞く歴史』第4章・第5章参照。

通史編の一節として「農民の暮らし」を執筆担当したとき、太陰暦から太陽暦へといった農村の時間の変化とともに、農民の一生（農業労働と社会活動）を取り上げた背景には、聞き取りの取り組みと農村社会に対する認識の広がりがあった¹¹⁾。

以上のような問題関心のなかで、私はそれまでの長野県、岐阜県に加え、1980年代半ばから山梨県中巨摩落合村の調査研究に取り組んだ。落合村は、1920年代半ばから30年代初めにかけて連年にわたり、小作農民が小作料の減額などを求める農民運動がおきていた地域であったが、そのころの私は、農民運動を理解するためには、経済から政治、社会、文化へと視野を拡張する必要があると考えるようになっており、村内で広範なテーマの調査や聞き取りを続けた。

以上の調査と研究をふまえ、1994年に単著『近代日本と農村社会——農民世界の変容と国家』（日本経済評論社）を発売した。1970年代末以来とりくんできた研究の集大成として、明治期を前史とし、第一次世界大戦期から1920年代と昭和恐慌期を主たる対象としつつ、経済的領域・政治的領域・社会的領域の3領域を対象に、以下の3つの方法による農村社会の総合的把握をめざした。第1は農家・農民家族の分析方法として、①家と家族の構成、②「階級」と「世代」による2つの視点、③労働と生活の関連に留意することであり、第2は地域社会の編成として、とくに①町村の担い手と、②公共性と階級性のかかわりに留意することであり、第3は運動史分析の新しい方法をめざすことであり、ここでは運動の担い手の経済的性格だけでなく、世代や教育程度、文化経験、生活意識とスタイルなど、広い意味での社会的性格に留

意した。以上をふまえた分析の結果、本書では、戦間期の農村社会の変化を3つの領域と農民運動に即して確認したうえで、戦間期の農村社会では、「階級」（小作農民）の参入と青年・女性の登用に新しい公共性が成立したと述べた。

以上が第1期の同時代史的検証であり、この検証は、現在からの視点によるものとも重なるものである。

2 第2期——同時代史的検証と自問——

(1) 時代と学問の変貌のもとで

今回、第2期の文章を整理するなかで、2009年に書いた「息苦しきの背後にあるもの」というメモを見つけた。そこには、「この20年のあいだに私はきわめて強い社会的な息苦しさを3度感じたことがある」とあり、1つが1989年における昭和天皇の自粛、もう1つが1997年ごろ、3つ目が2005年ごろとあった。1997年についてメモのなかには、「学問の世界では経済学における新古典派や社会学のシステム論が隆盛し、世の中では規制緩和論のなかで使われた自己責任が広がり始めていた。グローバリゼーションのもとで強い個人と自己責任論のみが高唱されていた」とある¹²⁾。

時代と学問の変貌についてはよく覚えている。1990年代に入り、時代と学問をとりまく状況は大きく変わろうとしていた。ソ連の解体による米ソ冷戦構造の崩壊のもとでグローバル化時代に突入し、1990年代後半に入ると市場経済の猛威が目につくようになり、やがてそれは新自由主義と呼ばれるようになった。他方で学問の世界では新古典派やシステム論が隆盛となり、言語論的転回の影響のもとで、日本近代史では国民国家論を含めて歴史認識をめぐる

11) 大門正克「農民の暮らし」『新潟県史』通史編8（近代3）、1988年。農民の一生への関心は、その後、農村における明治維新时期生まれと日清・日露戦争期生まれの二つの世代の社会的役割の相違への理解につながった（大門正克『明治・大正の農村』岩波ブックレット、1992年、前掲、大門『近代日本と農村社会』）。

12) このメモにある1989年の昭和天皇自粛については、大門正克「現代日本の社会構造と〈日帳・自粛〉——地域における天皇死去前後」『窓』第6号、1990年を執筆し、1997年については、後述のエッセイを執筆した（いずれも、前掲、大門『歴史への問い／現在への問い』に所収）。なお、このメモにある1985年の内容については、はっきりと思いつくことができない。

議論が盛んに行われるようになった。

こうしたもとの私は、時代と学問、歴史と現在を往還し、自分自身の認識と歴史研究の課題を反芻・更新するために、1997年から、日本経済評論社の『評論』や、阪神・淡路大震災後に神戸でできた震災・まちのアーカイブの『瓦版なまず』など、小さな媒体にエッセイを書くようになった。この点は第1期との大きな相違である。定年退職にあたり、今までの研究業績を整理したところ、1997年から現在に至るまで、私はエッセイやコメントなど、論文と異なるスタイルの文章を非常に多く書いてきたことを再確認した。

当時のエッセイには、時代と学問の断面についての考察や、「さまざまな自分」、「つながりの中の矛盾」、「いくつもの、つながりのなかで生きる」など、歴史のなかの主体をめぐって考えた試行錯誤の過程が刻まれている¹³⁾。エッセイを読むなかで、2009年のメモに書かれた1997年に感じた「きわめて強い社会的な息苦しさ」がしだいに蘇ってきた¹⁴⁾。

第2期の同時代史的検証のために、私はまず1990年代に感じた「きわめて強い社会的な息苦しさ」をたどり直し、ついで時代と学問の受けとめ方を振り返り、そのうえで私の研究の同時代史的検証に移りたい。

(2) 時代と学問の変貌過程に目をこらす

① 「きわめて強い社会的な息苦しさ」について考える

エッセイを再読すると、「息苦しさ」などを感じる社会のあり様を考察しているテーマとし

13) 1990年代後半から10年間に書いた歴史批評は、のちに、前掲、大門『歴史への問い／現在への問い』としてまとめた。

14) ちょうど同じころ、2000年から早稲田大学大学院文学研究科修士課程で非常勤講師をつとめ、それがきっかけとなって受講生と昭和史論争の研究会をつくり、昭和史論争に関する本を編集したことも、歴史をめぐる思索を深めることにつながった(大門正克編『昭和史論争を問う——歴史を叙述することの可能性』日本経済評論社、2006年)。

て、阪神・淡路大震災と学童クラブの移転問題があった。2つのテーマを振り返ってみたい。

1997年にはじめて書いたエッセイは、阪神・淡路大震災をめぐる「震災が歴史に問いかけるもの」であった¹⁵⁾。今でもよく覚えているのは、震災をめぐる議論にふれるなかで、霧が晴れていく感覚があったことである。阪神・淡路大震災は不透明な社会の断面を切り裂き、見えにくい社会のあり様を見ることができたと思えたからである。

エッセイのなかで私は、くりかえし時代の「不透明感」にふれている。バブル崩壊、東西冷戦構造崩壊後、時代は大きく変わろうとしていたが、「日常」と「行き先」の見えにくい時間が続いていた。「現在に対する不透明感は歴史研究にも及び、現在と過去とのつながりは今ほやけてわかりにくい。そこからは過去への関心の弱化と美化という相反する見方もつくり出されている」。このようなとき、「大震災という日常を超えた事態」により、「日常で見えにくい社会の断面が切り開かれ」、「茫漠としてとらえにくい人と人のつながりや、社会の仕組みがよく見える」ように思われ、震災はまた「人に社会の見方を鋭く問うことになった」、1997年当時、私は阪神・淡路大震災を通して、現在と歴史研究をこのように受けとめていた。

震災を通じて垣間見えたのは、現在の日本社会でしがらみのように人を縛る企業の存在であり、人と人のつながりを切断する格差・差異の体系であった。いずれも震災前には不透明で見えにくかったものであった。加えて、震災後には新たに被災者の〈こころ〉のケアの重要性が提起されるようになった。

阪神・淡路大震災から見えた社会の断面にかかわり、私は現在と歴史研究のなかにふたつの反応を読み取っている。ひとつは、「人と人のつながりには、個人を抑圧する危険性が含まれている」ことを認識したうえで、「なおかつ、つながりの再生抜きに〈こころ〉の回復」もあ

15) 『評論』第101号、1997年。

りえない、とする反応であり、もうひとつは、震災がしがらみを強める作用に目をとめ、社会と国家に距離をおいた態度を重視するものであって、それをエッセイでは「徹底した個人主義」「孤高の態度」と呼んだ。先に述べたように、震災は「人に社会の見方を鋭く問うこと」になり、そこにふたつの反応があると読み取ったのである。

阪神・淡路大震災を通じて得た感慨をさらに反芻するべく、私はその後も阪神・淡路大震災に関するエッセイを書き続けた。そのなかから、2000年に書いたエッセイを振り返る¹⁶⁾。

2000年1月16日、神戸の震災・まちのアーカイブの事務所で、河村直哉・中北幸家族共著『百合——亡き人の居場所、希望のありか』（国際通信社、1999年）の読書会が開かれ、参加して感想を述べた。中北百合さんは、中学2年生のときに阪神・淡路大震災にあい、自宅の倒壊で即死した。震災から3年後、新聞記者であった河村氏が百合さんの家族にインタビューを始め、21回にわたるインタビューを編集した本書ができた。本書はインタビューに答える家族、インタビューをする河村氏、河村氏による地の文で構成される。

本書を読むなかで私は、亡くなった中北百合さんと中北百合さんの両親（幸さん、富代さん）、河村氏との関係をずっと考えている。本書の輪郭を鮮明にするために、私は私の身近で亡くなった人を振り返り、『百合』と同じ時期に発刊された河村氏のもう1冊の本や（『地中の廃墟から——《大阪砲兵工廠》に見る日本人の20世紀』作品社、1999年）、柳田邦男氏による二人称の死、三人称の死の議論などを参照し、そのうえでもう1度『百合』にもどっている。

そこから浮かんできたことは、河村氏と中北富代さんのあいだに沈黙や葛藤があったこと

だ。河村氏は、自ら「せんのない問いを繰り返している」と述べ、河村氏の問いに対して、富代さんはいく度となくいいよども、考え込み、押し黙った。『百合』は沈黙・葛藤がよく見える本であり、当時の私は、「沈黙・葛藤をこそ」「読み取りたい」と書きとめている。「せんのない問い」と沈黙・葛藤のように、人のつながりを結ぶことには制約や負荷がともなう。

『百合』は、震災後のつながりが見えにくくなっていく過程を考えようとした本であり、インタビューには沈黙や葛藤の負荷を与える面があることを理解したうえで、なおかつ、二人称の死と三人称の死のつながりを再生させることに意味があると考え、とりくんだ本である。これらの試行錯誤をふまえたうえで、最後に私は、「『百合』が教えてくれたことは、つながりは働きかけるものだ」と書きとめている。人と人のつながりには制約がともなう。ただし、その制約を乗り越える道もつながりのなかにしかない。

『百合』をめぐるエッセイのタイトルは、「いくつものつながりの中を生きる」であり、当時の私の問題関心をよく示していた。『百合』を通して私は、阪神・淡路大震災後／1990年代における人との人のつながり、生者と死者のかかわりに目をこらし、認識を更新しようとしていた。

エッセイを書き始めた1997年、私は長男の通う日野市立さくら第1学童クラブの父母会長をしていた。学童クラブは小学校低学年が放課後に通う場所であり、小学校の校舎1階の空き教室を使っていたさくら第1学童クラブには、小学校の教室利用変更により、市から校舎の3階に移す案が出された。子どもが遊びまわる学童クラブが3階に移れば、怪我をする危険性が高くなる。父母会は3階への移転に反対し、学童クラブを校庭に新設する請願署名を集めることを決め、請願書名を市議会に提出した。請願は市議会で採択され、市は、最終的に学童クラブの新設を翌年度予算に盛り込むことを決める。さくら第1学童クラブは、こうして校庭隅

16) 大門正克「いくつものつながりの中で生きる——『百合』『地中の廃墟から』、そしてまた『百合へ』震災・まちのアーカイブ編『『百合』との往還』震災・まちのアーカイブ、2000年）、前掲、大門『歴史への問い、現在への問い』所収。

に新設なった建物に移転した。

このとりくみから10数年後の2010年、私は、学童クラブの移転問題を振り返るエッセイ、「再考：1990年代はどのような時代だったのか——歴史研究の検証のための小さな場所」を執筆している¹⁷⁾。エッセイの主題は移転問題であり、エッセイを書いたのは今回の時期区分の第3期であるが、1997年当時の私は、移転問題を「1990年代」と「歴史研究」の接点のなかで考えていたので、このエッセイは、第2期の同時代史的検証の貴重な材料といっている。エッセイをもとに時代と学問の変貌過程を振り返っておきたい。

当時の私は、移転問題に1990年代の時代状況が色濃く影を落としていて受けとめていた。学童クラブの保護者には新中間層が多く、階層的差異が少ない一方で、グローバル化や新自由主義のもとで、保護者にも海外駐在や公務員の配転がおよび、都市では新中間層の利害や自己責任が声高に強調されていた。時代が変容するなかで、バラバラな個人、あるいは反発し合う個人へと誘導する動力が強く働いており、それに抗う力は弱く、私はここに「社会的な息苦しさ」の一因を感じていた。後述するように、1990年代の私は、しだいに時代を「新自由主義時代」ととらえるようになり、新自由主義時代が人びとと学問に及ぼす影響の大きさについて観測するようになる。だが、そのことへの注意を喚起する議論はきわめて少なく、そのことも「社会的な息苦しさ」を強める要因だった。バラバラな個人へと誘導する動力は父母会にも反映してまとまりを難しくするとともに、財政の構造改革のもとで、市は財政逼迫を理由に学童クラブの新設を含めた公共的部門の予算削減を進めようとしていた。

移転問題にとりくむなかで、都市における共同性創出の困難や、人を個人へと誘導する動力を感じた私は、移転問題へのとりくみが、学童クラブや父母会の再認識につながる契機にな

らないかを探った。このとき、私が援用したのは歴史研究の蓄積であった。たとえば父母会は、「学童クラブは危ない」という訴えを掲げた。この訴えの背景には、社会運動研究における正当性の議論があり¹⁸⁾、この議論をふまえて広く共有できる訴えを設定し、とりくみの正当性を確保しようとした。あるいはまた、移転問題へのとりくみは、多様な立場の人によって成り立つ学童クラブのような場所を、行政だけに任せず、社会の公共的な広場として育てるための試みであると受けとめていた。この背景には、社会運動を対抗的側面だけでとらえずに、公共的關係とのかかわりに留意した私の歴史研究があった¹⁹⁾。歴史研究と現在を往還するなかでとりくんだ移転問題では、正当性の設定が保護者の自信に、また公共的な広場が父母会のまとまりにそれぞれつながり、父母会はまなじりを決することなく楽しみながら活動を続け、1か月で1万3000名余りの請願署名を集めた。

1990年代の時代状況が色濃く反映していた学童クラブの移転問題。学童クラブをめぐる共同性や人と人の関係には、分断や反発など、さまざまな困難が横たわっていたが、正当性を明示したとりくみを通じて、公共的な広場の必要性を共有できたことは、私にとってきわめて大きな経験であった。相互の関係性の矛盾を乗り越えるための、矛盾の動態的把握こそが必要であるというように、私は父母会のとりにくみしながら、関係性をめぐる認識を更新しようとしていた²⁰⁾。

②学問と時代を受けとめる

第2期の学問をめぐり、以下の3つから同時代史的検証を試みたい。1つは、私が所属していた都留文科大学文学部比較文化学科のことであり、2つにはエッセイを通じて歴史批評を

18) たとえば、深谷克己による百姓一揆の正当性の議論など。

19) 前掲、大門『近代日本と農村社会』参照。

20) 第2期の私は、このように同時代の状況に対するとりくみと歴史批評を相互に行いつつ、関係性をめぐる認識を更新しようとしていた（前掲、大門『歴史への問い／現在への問い』参照）。

17) 『評論』第179号、2010年。

行ったことであり、3つは、私の農村史研究についてである。

1990年代で40歳だった私は、都留文科大学文学部比較文化学科に属していた。1990年代／40歳代／都留文科大学／比較文化学科の結び目のなかで、私は多くのことを考えることになる。比較文化学科をめぐる、2001年、「居心地の良さと悪さと——比較文化学科での8年間」というエッセイを書いている²¹⁾。ここでいう居心地の「良さ」とは、「研究・教育上の制約がまったくなかったこと」であり、それに対して居心地の「悪さ」とは、「文字通りの「悪さ」ではなく、「座りの悪さ」とでもいうものである。比較文化の方法と折り合いつけることは容易ではなく、私はいつも比較文化学科に「座りの悪さ」を感じていた。だが、「その座りの悪さこそは、私の研究方法を問い返し、刺激を与えてくれた要因」であり、私は「「座りの悪さ」から多くの恩恵」を受けたとエッセイにある。

この感覚は、今でも鮮明に思い出すことができる。都留文科大学に私が移ったのは1993年4月。その翌年に『近代日本と農村社会』を発売した。経済学部出身で、経済史と社会史の接点のなかで日本近現代史を研究していた私は、比較文化学科に所属することで、「より幅広い視野と複眼的な視点を要求されるようになった」と受けとめていた。このことは、私が担当した科目「現代社会論」の構成にも反映した。当初、私は、「現代社会論」を戦後日本社会の歴史で構成したが、試行錯誤の末に、1年間を国民国家、経済成長、フェミニズムとジェンダー、エコロジーの4つのテーマで区分する構成に変更した。フェミニズムとジェンダーおよびマイノリティの2つのテーマは、比較文化学科の基幹科目でもあった。1990年代の大学教育にこのテーマの科目を掲げた大学は珍しく、比較文化学科は、いわば当時、最先端の教育を試みていたことになる。

21) 大門正克「居心地の良さと悪さと——比較文化学科での8年間」都留文科大学比較文化学会『比較文化の視点』第2号、2001年。

比較文化学科に所属したことは、私の研究にも大きな影響を与えた。1990年代の私は、学問の動向のなかで国民国家やジェンダーに関心をもちただけでなく、比較文化学科の場でもこれらのテーマについて考え続けていた。「農村史というフィールドを維持しながらも、その後、私が農村女性の歴史にとりくむようになった背景には、比較文化学科に在籍したことがまちがいなく関係していた」、とエッセイに書きとめている。あるいは、教員養成の都留文科大学に所属したことは、私が教育の歴史と作用に関心をもち一因になった(後述)。比較文化学科に通った私は、学問研究の方法を反芻していたといっていいただろう。

学問の2つ目は歴史批評を始めたことである。1990年代の日本近現代史研究では国民国家論が大きな影響を与えていた。国民国家論については西川長夫氏が問題提起を重ねていた。当初、西川氏の提起には共感するところが多かったが²²⁾、国民化するという国民国家の特性と問題点を強調する西川の議論を受けとめた歴史研究では、軍隊や衛生など国民国家の各局面にわたり、人びとが国民化される様相を描くものが多くみられるようになった。

国民国家論をめぐる議論のなかに、私は2つの問題点を感じていた。ひとつは、人と人の関係把握の方法が国民化されるという一方向に強く傾斜していたことである。先述のように、1990年代後半の私は、人と人のつながりには制約があることを認めたくえで、つながりを変えることなしに制約を乗り越えることができないことも実感していた。人と人のつながりを理解するためには、一方向だけではない、相互関係の動的把握が不可欠であり、そのような観点から国民国家論をめぐる議論に疑問を呈した。

もう1つは、新自由主義時代状況が人のつながりや学問に大きな影響を与えていると観測で

22) 西川長夫『国境の超え方——比較文化論序説』筑摩書房、1992年。

きるにもかかわらず、そのことを自覚した議論がきわめて乏しかったことであり、この点についても疑問を投げかけた。2003年に小沢弘明が、歴史学の現在を「新自由主義時代の歴史学」と名づけ、歴史学は新自由主義時代のもとにあること、「認識論からの攻撃」には受けとめるべきものがあるが、それでも歴史学に「必要性和存立可能性」があるとすれば、それはどこに求めることができるのかと問題提起したとき、私は強く賛意を示したが²³⁾、しかし、その後、小沢がくりかえし指摘したように、世界でも日本でも、歴史学は新自由主義への反応がもっとも鈍い分野の一つであった²⁴⁾。

2008年に発刊した『歴史への問い／現在への問い』（校倉書房）は、1990年代後半から10年間の私の歴史批評とエッセイを収録したものである。いま、この本を再読すると、当時の私は、「物事が全体へと馴致され回収される「部分」と化すことに警戒するとともに、何故に小さなものが問題であったのか、それを忘却しないことが大切だろう²⁵⁾と述べた市村弘正氏や、「わたし（たち）の「矛盾」に気づくこと、それは、新しい「つながり」を求めての、あなた（たち）への訴えかけです²⁶⁾と述べた岡野八代氏の議論を手がかりにしながら、認識を反芻・更新しようとしていたことがわかる。そのころ、私が新たに使うようになった言葉に、「行きつ戻りつ」や「とらえ返す」がある。それらは、当時の私の思考方法をよく示すものであった。

学問の3つ目は私の農村史研究である。第3期は、農村社会の研究から農民家族の研究、とくに農村女性の歴史研究に農村史研究のテーマを拡張した。なぜ農村女性だったのか。そこに

23) 大門正克「『聞きえなかった声』、そして新自由主義の時代」『歴史学研究月報』第519号、2003年。

24) 小沢弘明「新自由主義時代の自由主義研究」『人民の歴史学』第174号、2007年。

25) 市村弘正『小さなものの諸形態』筑摩書房、1994年。

26) 『ジェンダー化する哲学』昭和堂、1999年のなかの岡野氏の言葉。

は、いくつかの結び目があった。第1に、前述のように1994年に『近代日本と農村社会』をまとめた際に、農村女性の研究が十分でないことを受けとめ、農村女性を含めた農村史研究をめざしたことである。のちに述べるように、第2期の私は、聞き取りでも農村の女性に話を聞くようになった。第2は、1990年代以降になるとジェンダーの視点が提起されるようになり、それに応える必要性を感じたこと、第3として、前述のように、1990年代に都留文科大学文学部比較文化学科に勤めたことが、ジェンダーの視点を考える契機になったことである。

第2期の私は、戦時期の労働力動員との関係で農民家族の対応や変化を検討し²⁷⁾、岡山県高月村の労働科学研究所報告を包括的に検討することで農村女性の労働と出産のかかわりを考察し²⁸⁾、戦時から戦後にかけて農村女性の実証的な調査研究に尽力した山岸正子の足跡をたどることで、農村女性の労働と生活のかかわりを深く考察するなど²⁹⁾、農民家族と農村女性の研究を通じて、農村社会の理解を深めようとした。

従来の経済史研究では、戦前の農村に地主と小作の階級関係を認め、そこから階級や階層に焦点を合わせていた。それに対して1994年に刊行した私の『近代日本と農村社会』では、階

27) 大門正克・柳沢遊「戦時労働力の給源と動員——農民家族と中小商工業者を対象に」『土地制度史学』第151号、1996年。

28) 大門正克「1930年代における農村女性の労働と出産——岡山県高月村の労働科学研究所報告を読む」横浜国立大学経済学会『エコノミア』第57巻第1号、2005年。

29) 大門正克「もう一人の農村女性研究者、山岸正子——戦後の東北を拠点として」『女性史学』第15号、2005年。そのほか、この時期の農民家族に関連する研究として、大門正克「農民の生活の変化——1900年前後の日本」『講座世界史』第4巻、東京大学出版会、1995年、大門正克「農村社会と都市社会」『日本経済史』第2巻、東京大学出版会、2000年、大門正克「農業労働の変化と農村女性——20世紀日本の事例」西田美昭／アン・ワズオ編『20世紀日本の農村と農民』東京大学出版会、2006年、などがある。

層と世代の2つの視点で戦前の農村社会を理解しようとした。その後、農村女性に焦点を合わせた私は、女性をめぐる労働と生活のあいだにも重要な論点があることに気づいたのである。

以上のような時代と学問に対する反芻のなかで、私はやがて時代状況を「新自由主義時代」ととらえ、新自由主義時代に向き合うなかで歴史と歴史学について考えるようになった。私をはじめ新自由主義と歴史学の関係を論じたのは、1997年のことである³⁰⁾。今から振り返れば、1990年代後半以降の日本社会で新自由主義の猛威が吹き荒れていたことは見えやすいことだろうが、当時の日本では、格差社会論は提起されていたものの、それを新自由主義と結びつける議論はごくわずかだった。1996年に鹿野政直氏が論じたものを除けば³¹⁾、時代の大きな変貌のもとで歴史学のあり方を考える議論自体が不足しており、そのことも気になっていた。

それでは、当時の私は、なぜ新自由主義時代と歴史学を結びつけて考えようとしたのか。

今回、同時代史的検証をするなかで再確認したことは、第2期の時代への向き合い方は、現代的関心をふまえて歴史研究をめざした第1期を継承するものであり、第2期の私は、現代という時代に向き合いながら、歴史的思考全体を再考しようとしていたことである。時代と学問が大きく変貌するもとの、私は第1期と同じように研究を進めるだけでは不十分ではないかと感じていた。私は、歴史への問い、現在への問いを重ねるなかで、新自由主義時代の現在と過去を往還し、私自身の研究と思考方法も含め、

30) 大門正克「1990年代とはどういう時代なのだろうか——歴史研究の方法と意識をめぐって」日本経済評論社『評論』第112号、1997年10月。続けて、大門正克「歴史意識の現在を問う——1990年代の日本近代史研究をめぐって」『日本史研究』第440号、1999年4月、を執筆し、新自由主義のもとでの歴史学のあり方について、議論を深めようとした。いずれも、前掲、大門『歴史への問い、現在への問い』所収。

31) 鹿野政直「化生する歴史学」および鹿野政直「自明性の解体のなかで」いずれも1996年（鹿野『化生する歴史学』校倉書房、1998年、所収）。

歴史的思考全体を再考する手がかりを得ようと試行錯誤を重ねた。

(3) 研究課題を反芻・更新しつつ拡張する

以上のような思考過程をへて、第2期の私は研究課題を反芻・更新しながら拡張を試みた。拡張のポイントは6つある。

①「教育経験」という問い

1点目は、「教育経験」という問いを携えるようになったことである。1980年代以来の聞き取りのなかで、戦前の農民が書く、読むといったことに関心をもっていたことや「講義録」の存在を知り、1990年代における時代と学問の変貌過程のなかで、教員養成の都留文科大学に勤めていたこと、1990年から近代日本社会研究会をつくって「日本近代からの問い」を考えるようになったこと、歴史と現在における人びとの関係について反芻したことなどが結び目になり、私は歴史のなかの教育、とりわけ人びとが教育を経験したことの意味について関心をもつようになった。教育経験は、教育を受けたことがその後の人生に与えた影響を考える視点であるとともに、経験を通じて私は人と人の関係の変遷を考えようとしたのである。

以上より私は、農村と都市における子どもという問いを設定し、家族と扶養のなかの子どもと学校の望む子ども像、「よい子」などの相互関係を考察し、ジェンダーの視点や、教育を受けたことがその後の人生にどのような影響を与えたのかを考察した『民衆の教育経験——農村と都市の子ども』（青木書店、2000年）を第2期に刊行した。この本では、家族と扶養に焦点を合わせる点で第1期の『近代日本と農村社会』の視点を継承するとともに、子どもの教育の受容と反発、対抗、とらえ返しの過程（教育経験）に照準を合わせ、検討することを新たな課題とした。「経験」という視座、「とらえ返す」という視点は、いずれも第2期の時代と学問の変貌過程において、思考の反芻・更新のなかからたどりついたものであり、その点でこの本は、第2期の試行錯誤の過程から生まれたものだと

いっていい。

②史料読解への留意

「経験」や「とらえ返す」という視点にみられるように、第2期の私は、第1期以上に歴史過程を多面的に検討する必要性を感じていた。それは、史料読解への留意に結びついた。たとえば、上記の『民衆の教育経験』の冒頭で、東京西郊の田無町の小学校史料をとりあげて検討を加えている。1900年代の田無町の田無尋常小学校には、不就学に関する史料が残されており、1901年には学齢児童の2割におよぶ不就学者が存在していた。不就学申請書には「生活極めて困難故に本人を要す」という文章がある。この文章は、行政側が不就学を認める理由を示したものであるとともに、保護者の側が不就学を申請する理由でもあった。この史料が存在する1900年代は、従来、就学率が上昇して初等教育が定着した時代と考えられていたが、実際には生活上で子どもを必要としていた時代、それが日清・日露戦争期の田無町の状況であった。田無町で不就学になった子どもは、田無街道筋の下層社会的な職業を親に持ち、尋常小学校5、6年生になった女子が圧倒的に多かった。

ここにはいくつも検討課題が含まれていた。不就学申請書は、現在の歴史研究でいえば「貧者の手紙」など、長谷川貴彦氏が注目しているヨーロッパ史のエゴ・ドキュメントといってよく、あるいは小野寺拓也氏によって検討された野戦郵便のように、ある一定の条件下で書かれた一次史料であり、その読解が試されるものである³²⁾。あるいはこの史料からは、教育を考えるうえで家族の労働と扶養に焦点を合わせる必要性や、ジェンダーの視点をもつ必要性を指摘することができよう。

史料読解ということでは、『民衆の教育経験』のなかでもう1つ、学童集団疎開とかかわって検討した吉原幸子日記をとりあげておこう。教師による検閲やメディアによる少国民圧

32) 長谷川貴彦『現代歴史学への展望』岩波書店、2016年、小野寺拓也『野戦病院から読み解く「ふつうのドイツ兵」』山川出版社、2012年。

力のもとで書かれた学童集団疎開日記を検討することは容易ではない。私は、吉原の日記を時間軸のなかに位置づけ、吉原の疎開体験と戦後体験、集団司会者による戦後の回想を重ねることで、日記の歴史的・社会的文脈を徹底して読み解こうとした。

③聞き取りの変化

第2期には聞き取りの方法にも変化があらわれた。2017年に発刊した『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』（岩波新書）のなかで、私の聞き取りを振り返っている。第1期に「テーマを聞く」から「人生を聞く」方法へと変化していた私の聞き取りは、1997年にある農村女性の聞き取りで語ってくれなくなり、大きな壁にぶつかった。なぜ語ってくれなかったのか、容易に答えのないなかで、少しずつ原因を探り、2003年から私は岩手県北上市和賀町で農村女性の聞き取りを再開した。どのように聞けばいいのか、試行錯誤をするなかで、私はそれまでの私から質問する方法ではなく、語り手の語りを黙って聞くようになる。そのようななかで、聞き取りでは、それまで関心をもたなかった「聞く」ということが特に大事であることに気づくようになる。そこから私は、「聞く」にはask（尋ねる）とlisten（耳を傾ける）の2つの方法があることに気づき、それ以来、listenすることに重点をおいて聞き取りをするようになった。「askからlistenへ」という聞き方の変化は、聞き取りの語り手と聞き手の関係、歴史研究における対象と研究者（私）の関係を考えることにつながり、聞き取りによるオーラル・ヒストリーは、文字史料による歴史研究とは、もう1つ異なる大事な歴史研究であることに気づくことになる。

④『生きる』2冊の編集

第2期において、大門正克・安田常雄・天野正子編『近代社会を生きる』『戦後経験を生きる』（吉川弘文館、2003年）を刊行した。この2冊は、「近現代日本社会の歴史」と名づけ、1冊目は明治維新から1920年代までを、2冊目は1930年代から現在までを対象とした。2冊の本は、

それぞれの時代の「経験のリアリティ」を描き、時代のなかの「共通性」とともに、「家庭」や「さまざまな人生」「南洋」などの多様なテーマを扱うことで、「経験のリアリティ」を追究しようとしたものであった。「さまざま」という視点には、国民化されることを優先する国民国家論への批判が含意されていたといっていだらう。

とはいえ、この2冊には、いくつかの難点があった。1つは、藤野裕子氏から書評で指摘されたように、多様性を描くことは必ずしも「経験のリアリティ」の保証につながらないことであり、藤野氏からは、「可能性そのものが新たな閉塞を呼び込む」ような、可能性と閉塞性の相互不可分の関係まで描いてはじめてリアルな叙述になるという指摘を受けた³³⁾。2つには、「さまざまな人生」という視角設定にかかわる。この点は、倉地克直氏の書評で指摘されたことであり、くらしの場における「さまざま」な「きずな」と「しがらみ」に注目するのであれば、そこを出発点として、「全体を構造化するという方向」が必要だったのではないかと批判を受けた³⁴⁾。倉地氏が具体的に示した方向は、「国家」の軸と、くらしにおける「労働」と「消費」の軸であった。

⑤「経験」の視界を問われる

第2期でもう1つとりあげておくべきことは、『民衆の教育経験』への批判である。この本を発刊したころ、杉原達氏と数回、会う機会があった。当時、杉原氏は「経験」を手がかりに歴史を考えようとしており、日本近現代史で「経験」という言葉を使っていた安田常雄氏や私の研究にも関心を寄せてくれていた。杉原氏からは大学院のゼミナールでこの本をテキストに取り上げてくれると聞き、それから1年後に再会する機会があった。

このときのことは、以前に書いたことがある

33) 藤野裕子「書評 大門正克ほか編『近代社会を生きる』』『歴史評論』第675号、2006年、100頁。

34) 倉地克直「書評・『近代社会を生きる』『戦後経験を生きる』を読んで』『岡山地方史研究会』第104号、2004年、14頁。

が³⁵⁾、今でも一緒に昼食をとった店や座った席などを含め、大学院ゼミナールで読んだ感想を聞いたときのことを鮮明に覚えている。杉原氏は、評価できる点を話してくれたうえで、「経験」の歴史研究は、まだまだこれからですね」と述べ、在日朝鮮人の院生の次のような感想を教えてくれた。「俺たちがいない」。

この本のサブタイトルは「農村と都市の子ども」であり、当初、本で書かれていないことへの批判（欠如論的批判）に私は強い違和感を覚えた。だが、「俺たちがいない」という言葉は、その後、首先につきつけられたナイフのように長く私の意識に残った。農村史研究から出発した私にとって、「農村と都市」の両方を対象にしたこの本は、私なりに対象の拡張をはかったものだった。だが、杉原氏から伝えられた言葉は、『民衆の教育経験』と名づけた本を発刊するにあたり、私の視界が農村と都市の子どもに限定されていた、その歴史認識をあぶりだし、大きく揺さぶった。2000年代の私は、その後、この言葉をずっと考えることになり、④で提起された問題を含め、第3期に新たなとりくみをするようになる（後述）。

(4) 同時代史的検証をふまえてみて

以上、第2期の同時代史的検証を試みてきた。第2期の同時代史的検証にあたっては、時代と学問の変貌過程で考えたことに多くを費やしたが、これは、定年という区切りにあたって私自身の研究を振り返るうえで欠かせない作業であった。この検証を通じて、あらためて第2期が反芻・更新の試行錯誤の過程であり、その思考過程がよみがえってきた。冷戦構造崩壊によるグローバル化、新自由主義の時代と歴史認識論争が重なり、時代と学問は大きく変貌していた。そこに聞き取りの失敗も重なり、私は1997年からエッセイを書き始め、歴史批評を始めた。エッセイを始めたのも聞き取りの失敗もともに

35) 大門正克「杉原達『越境する民』』歴史学研究会編『歴史学と、出会う——41人の読書経験から』青木書店、2015年。

1997年、1997年は私の研究の重要な画期であった。第2期の私の反芻・更新の過程は、『民衆の教育経験』と『歴史への問い／現在への問い』の2冊に刻まれている。

同時代史的検証を行うことで、2008年の歴研大会報告の際には見えにくかった第2期と第1期のかかわりが見えるようになり、第2期が第1期から第3期に至る重要な架け橋であったことがわかってきた。第2期には、現在との対話を重ねつつ、全体把握をめざす第1期のスタンスを受け継ぎながら、歴史批評を重ね、新たに経験やとらえ返すという視座を含めた歴史研究を進めた。史料読解と聞き取りを重ねたことも、第2期の反芻・更新の過程とマッチしていた。

以上のように第2期は、文字通り、〈歴史への問い、現在への問い〉を重ねるなかで、新自由主義に抗する道（方途、拠点）を探り、プロセスを重層的、相互規定的にとらえることなど、方法的な模索を重ねた時期であり、第2期での試みは第3期につながることになる。

ただし、第2期の同時代史的検証を通じて、第1期から第2期にかけて曲折の過程があったことも見えてきた。それは「労働と生活」の視点である。「労働と生活」は第1期の農民家族の重要な分析方法であった。この視点は、第2期の『民衆の教育経験』にも継承され、この本では、家族の労働と扶養の視点から子どもと教育のかかわりを検討していた。それに対して、2003年に『近代社会を生きる』『戦後経験を生きる』を編んだとき、そこで選んだ「さまざま」という視点は、「国家」あるいは「労働」と「消費」の視点がないことを倉地克直氏から批判された。第1期から第2期にかけては、継続の面と曲折の過程と両面があったことが確認できた。

(5) 自問——現在からの検証

今回の同時代史的検証を通じて、第1期と第2期の研究のつながりが見えてきたが、「はじめに」で述べたように、2008年に「生存」の歴史学」を提起した際に、それ以前（第1期）の研究とのつながりがよく見えていなかったこ

ともたしかであった。今までの同時代史的検証の結果、第1期から第2期にかけては、継続面と曲折の過程の両面があったことがわかった。現時点から自問してみれば、第2期は新自由主義と歴史認識の両面で大きな影響を受けた時期であり、そのもとで私は試行錯誤を重ねて自分の議論を組み立て直そうとした。継続と曲折の過程は、この試行錯誤のなかであらわれたことであった。

3 第3期の同時代史的検証

(1) 同時代史による検証

第3期は、2000年代後半から現在までである。同時代史的検証を5点にわたり行う。

① 「生存」の歴史学」の提起——2008年歴史学研究会大会全体会の報告

2007年秋に、歴史学研究会（以下、歴研と略記）委員会より、2008年歴史学研究会大会全体会の報告を依頼された。全体会のテーマは、「新自由主義の時代と現代歴史学の課題——その同時代史的検証」である。2007年10月19日付で全体会を担当する歴史学研究会委員に私が送ったメモが残されているので、それを検証してみたい³⁶⁾。

歴史学研究会委員会の問題提起は、2007年の現在を「新自由主義の時代」と位置づけ、「現代歴史学の課題」を探るために「同時代史的検証」を行うことであった。そのころ、国民国家論などをめぐる歴史批評は行われていたが、個別研究とは別個に行われる傾向が強かった。歴史学研究会の問題提起は、歴史批評を批評にとどめず、歴史の具体的な課題に即して検証せよということだと受けとめた。当時の私は2系列の仕事をしていた。農村女性を含めた農村史研究と歴史批評である。歴研委員会の問題提起に対して、私は2系列の仕事を別に行うのではなく、接点を明示せよということだと受けとめた。批評を批評にとどめず、具体的な歴史過程に即

36) 以下は主に、報告依頼を受けて作成し、歴史学研究会委員に送った私の「歴研大会メモ」(2007年10月19日)による。

した検証を行うことが歴史学の課題としてあると、私は受けとめたのである。

接点を考えるなかで、「生存」というテーマが浮かび、「生存」の歴史学として5つの含意をこめ、問題提起を行った。①「生存」は、農村女性の出産・労働・生活改善研究の延長線上で考えているテーマであり、労働と生活の両方を含む概念として設定する、②戦間期から1950年代に至る時代は、「生存」が大きく問われた時代であり、地域に即してそれを論証する、③社会経済史研究と歴史研究が乖離した状況にあり、両者を架橋するために、歴史のなかの人びとの存在意義をあらためて(根源的に)問い直す、そのために「生存」まで立ち戻って考える、④「生存」は「構造」と「主体」の接点にある領域であり、制度の側からではなく、「主体」の側から考える、あるいは「構造」と「主体」の接点から考える視点をもちたい、⑤「生存」は新自由主義の時代に問われている課題である。私は報告タイトルを「序説「生存」の歴史学——「1930～60年代の日本」と現在との往還を通じて」と定め、1930～60年代における日本の生存システムを岩手県の例を中心にして報告した³⁷⁾。

②『戦争と戦後を生きる』

新たに通史を執筆する機会が訪れた。小学館が始める「日本の歴史」のなかで、1930年代から1955年までの巻を担当することになったのである。通史の検討は2005年から始まり、私の巻の発刊は2009年だった。対象とする時代は、私が長年検討してきた時期にあたる。戦時・敗戦・戦後を含むこの時代を通史としてどのように叙述するのか。

当時を思い起こせば、通史に組み込む課題として2つの検討に腐心していた。1つは、『民衆の教育経験』について投げかけられた「俺たちがいない」という批判への応答である。この点について同時代の状況を振り返れば、1990年代以降の時代と学問の変貌過程があり、この

変貌過程は、さらに強制連行や「慰安婦」など、アジアにおける日本の戦争をめぐる未検討・未解決の課題への提起と重なっていた。この変貌過程に対して、新自由主義の時代や歴史認識をめぐる問題に対して応答する試みを重ねたことはすでに述べた。ただし、この変貌過程と重なっていた、アジアにおける日本の戦争をめぐる問題については、私は自分の研究の対象にすることがなかった。「俺たちがいない」という言葉は、まさにそのことを問い返し、農村や都市の子どもだけで「民衆の教育経験」を論じることができるのか、と批判したのではなかったか。ではどうしたらいいのか。2000年代に入ってから私は、『民衆の教育経験』を手がかりにして、戦時中の肢体不自由児の学校や協和教育、南方占領地の教育を検討し、戦後の朝鮮学校や民族学級について調査研究を試み、対象を広げることの意味について考えてきた³⁸⁾。通史の検討以降は、これらの検討課題を含め、アジアにおける日本の戦争をいかに通史に組み込むことができるかを考えるようになった。

もう1つは、岩手県北上市和賀町で再開した聞き取りである。「askからlistenへ」という聞き方の変化のなかから聞こえてきたのは、たとえば和賀の女性たちの話がくりかえし戦時中にもどることだった。歴史の叙述は時系列が大前提である。歴史のなかに人びとを叙述するとき、たとえば戦時中にたびたびもどる女性たちの話はいかに位置づければいいのか。通史における時間をどのように考えればいいのか。

通史を検討した際のレジュメが2005年から残されている。のちに発刊された私の巻では、人びとの移動やアジアにおける日本の戦争を重要な視点・テーマとして組み込んでおり、この点は最初の構想から含まれていた。2006年9月の構想では、5人の移動を追いながら叙述す

38) 大門正克「子どもたちの戦争、子どもたちの戦後」『岩波講座アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、2006年、大門正克「教育という営み」の戦後史——教育基本法改正問題から考える』『人民の歴史学』第174号、2007年。

37) 『歴史学研究』第846号、2008年、所収。

る方法や目次構成など、発刊された通史に近い内容が確認できた。とはいえ、この段階で私はすでに通史の確かな見通しをもっていたわけではなかった。先述のように、2003年の共編著『近代社会を生きる』『戦後経験を生きる』は、通史としての自覚が十分でなく、課題も残されていた。2冊の共編著の体験をふまえ、通史を書くことを正面から考えるためには、既存の通史を前提にして個別の事例を書くだけでなく、かといって個別の事例を羅列に終わらせない必要があった。通史の叙述において、大きな歴史と小さな歴史の双方を問い直す必要がある、当時そのことに腐心していたことをよく覚えている。

試行錯誤のなかで私が採用したのは、2008年に提起した「『生存』の歴史学」を通史に導入することであった。「『生存』の歴史学は、「構造」と「主体」の接点に位置づけたものであり、私はこの視点をふまえ、対象とする時期について、人びとを「生存」させるための政策による大きな歴史と、「生存」するための個人の「経験」の接点のなかで時代を描く構想をたてた。

2009年に発刊された私の通史は、『日本の歴史15 戦争と戦後を生きる』である。この本の「はじめに」では、聞き取りと移動に留意しながら、生存の仕組みが大きく変わった時代を描くこととともに、敗戦・終戦で時期区分せず、戦前・戦時と戦後の継続と断絶に注意し、東アジアのなかの日本という視点をもつことを述べ、時間と空間の両方への留意を述べておいた。そして「おわりに」では、対象とする総力戦を挟む二五年間は、「生存の仕組みの巨大な転換期」であり、本書はその過程を、国家と人びとの「生存をめぐる相互交渉の歴史」として考察してきたと述べた³⁹⁾。

時間と空間にかかわって、本書について少しだけ振り返っておく。当時私は、この本が対象にした25年間の時間と空間をどのように認識するのかは、通史にとって決定的に重要な事柄

39) 大門正克『全集日本の歴史15 戦争と戦後を生きる』小学館、2009年、364頁。

だと思っていた。大きな歴史でいえば、従来の通史では、総力戦から日本・沖縄の占領への移行として描かれることが多かったのに対し、本書では、大東亜共栄圏から戦後の東アジアのアメリカ支配への転換と位置づけた⁴⁰⁾。それに加えて本書では、個人の経験から時代をとらえ返すこと、とくに戦後の10年間は、人びとが戦時期をとらえ返そうとした時代として位置づけることで、大きな歴史と小さな歴史の接点を動的にとらえようとした。本書第7章「戦後社会をつくる」のなかに「生存の仕組みを変える試み」と「東京・枝川の生存の歴史」の2つの項をおき、前者では岩手県和賀町を、後者では枝川の在日朝鮮人をそれぞれ対象にしたのは、動的把握を試みるためであった。動的把握には、時系列による時間の流れだけでなく、先の和賀町の聞き取りのように、戦時と戦後の往還も大事な検討課題だった。

③「生存」の歴史学の更新

2011年3月に東日本大震災がおきた。阪神・淡路大震災以来、災害と歴史学の関係について考えてきた私は、東日本大震災後の事態に対して歴史学がはたす役割を考えるために、東北の近現代史を研究する友人4人、編集者、朝日カルチャーセンター社長（当時）の7人で一緒に、東北の復興と歴史を考えるフォーラムを被災地で開催してきた。気仙沼フォーラム（2012年）、陸前高田フォーラム（2013年）、福島フォーラム（2015年）であり、この間のとりくみの成果を2冊の本に反映させてきた⁴¹⁾。以上のとりくみを主な場としつつ、私は2008年に提起した「『生存』の歴史学」の更新を試みてきた。

40) 本書の第5章には、「戦争の終わり方と東アジア」をおいた。この点にかかわって、長志珠絵氏は、本書の書評で、「戦争の終わり方と『戦後』像」に本書の特徴があると指摘している（長志珠絵「書評 大門正克著『戦争と戦後を生きる』」『同時代史研究』第3号、2010年）。

41) 大門正克・岡田知弘・川内淳史・川西英通・高岡裕之編『『生存』の東北史——歴史から問う3・11』大月書店、2013年、同編『『生存』の歴史と復興の現在——3・11 分断をつなぎ直す』大月書店、2019年。

表1 「生存」の仕組み

A 人間と自然（人間と自然の物質代謝）
B 労働と生活（支配的経済制度、労働といのち、地域循環型経済）
C 国家と社会（国家の性格、社会の編成）

出典：大門正克「『生存』の歴史——その可能性と意義」（注46参照）

「『生存』の歴史学」の更新にとって大きな契機になったのが気仙沼フォーラムであった。前述のように、「『生存』の歴史学」は、「労働」と「生活」を分離させて考察する傾向の強い研究状況に対して、「労働と生活」の両方を含む概念として提起したものであった。気仙沼フォーラムでは、とくに次の2人の議論から大きな問題提起をうけた。1人は、気仙沼で長く民俗を研究してきた川島秀一氏であり、川島氏は報告をまとめた文章で、「今回の大津波は見事なまでに、この近世から現代にかけて埋め立てたところだけが浸水している」と述べ、「人間が埋め立てたところには、いつかまた海が取り返しにやってくる、自然が揺り戻される」という衝撃的な記述をした⁴²⁾。川島氏は、この衝撃的ともいえる指摘が三・一一後の復興計画でなかなかふまえていないことから、「震災前の三陸沿岸の、生活感覚や歴史的認識が排除された復興計画は必ず失敗するというを明らかにするため」に文章を書かねばならなかった、と述べた。

もう1人、清水敏也氏は、気仙沼で塩辛を生産してきた中小企業の社長である。清水氏は、「気仙沼という水産業に特化した産業構造の町」における地域循環型経済のなかで塩辛を生産してきたといい、3・11後も、「船があって、漁業を支える産業や技術があって、私たちがいる、そういう営みをしてきた気仙沼という町の歴史や文化をのせた商品にこそ、かけがえのない価値があると私は考えました」と述べた⁴³⁾。

以上の議論は、私の「『生存』の歴史学」に

42) 川島秀一「三陸の歴史と津波——海と人のつながり」前掲、『『生存』の東北史』所収。

43) 清水敏也「気仙沼で海とともに生きる」前掲、『『生存』の東北史』所収。

対して根本的な更新を迫るものと私は受けとめた。2008年に提起した「『生存』の歴史学」では、労働と生活を「生存」の内容と位置づけていたが、川島氏や清水氏の議論は視野に入っていなかった。2人の議論は、いわば「人間と自然」の関係に関するものであった。

気仙沼フォーラム後、朝日カルチャーセンターとフォーラムにとりくんできた私たちは、その成果を『『生存』の東北史』としてまとめた⁴⁴⁾。私はそこに2つの文章を収録した。1つは、岩手県北上市和賀町における、1950～60年代における「いのちを守る農村婦人運動」を検討したものである⁴⁵⁾。和賀町の分析では、とくに「生存」と地方自治の関係について考察した。ここでの分析からすれば、「『生存』の歴史学」には、「労働と生活」に加えて「国家と社会」が重要な意味をもっていた。

以上の検討をふまえ、私は同書の終章「『生存』の歴史」を執筆し、新たに「『生存』の仕組み」を整理し（表1）、「『生存』の歴史学」の更新をはかった⁴⁶⁾。「『生存』の仕組み」は、「自然と人間」「労働と生活」「国家と社会」の3つの次元で構成されること、

そのうえで、3つの次元の順番を考え、3つのなかでは「人間と自然」がもっとも基礎をなし、ついで「労働と生活」があり、それらを「国家と社会」で包含すると考え、その順番で構成した。

「『生存』の歴史学」はその後、さらに2冊目の本の成果をふまえ、表2のようなかたちに議

44) 前掲、『『生存』の東北史』。

45) 大門正克「いのちを守る農村婦人運動——『生存』の足場を創る歴史の試み、岩手県和賀町」前掲、『『生存』の東北史』所収。

46) 大門正克「『生存』の歴史——その可能性と意義」前掲、『『生存』の東北史』所収。

表2 「生存」の歴史学

○「生存」の仕組み	
$\left\{ \begin{array}{l} A \\ B \\ C \end{array} \right.$	A 人間と自然
	B 労働と生活
	C 国家と社会
○「生存」することの側から考える視点	
○人びとの「生存」を支える資料と歴史	文献、モノ、文化、記憶など
○歴史と現在の往還のなかで考える視点	
出典：大門正克「「生存」の歴史をつなぎ直す——分断を越える道を探る」(注47参照)	

論を発展させている。表2の作成にあたり、私は福島県に関する3・11後の手記や聞き書き、証言などを多数集めて検証した⁴⁷⁾。ただし、表1の「「生存」の仕組み」の作成にあたっては、私自身の個別分析(岩手県北上市和賀町)をふまえてのものだったのに対して、表2では個別文責を欠いている。「「生存」の歴史学」の更新(総括)にあたっては、個別分析との相互往復が必要であり、新たな個別分析を行った際に説得的な更新が可能になると思われる。

④史料読解への自覚

第2期に続いて第3期でも史料読解に自覚的にとりくんだ。『戦争と戦後を生きる』では、写真や短歌、川柳や聞き取りなど、新たな史料の開拓と活用にとりくみ、資料読解をめぐる論稿もいくつか書いた⁴⁸⁾。歴史学研究会の編集長をつとめているときには、『歴史学研究』誌上で、特集「史料の力、歴史家をかこむ磁場——史料読解の認識構造」を企画・編集した⁴⁹⁾。すぐあとで述べるように、オーラル・ヒストリー

に関して発刊した『語る歴史、聞く歴史』も、史料読解の拡充をはかったものでもあった。

⑤『語る歴史、聞く歴史』の発刊

『戦争と戦後を生きる』を発刊したあとで、『Jr.日本の歴史』の1冊として、小学校高学年から中学校を対象にした日本の戦後史を発刊した⁵⁰⁾。私としては、ジュニア版として通史を発刊する試みであった。

その後、私はオーラル・ヒストリーの本を発刊する作業にとりくむ。長年の農村史研究のなかで聞き取りにとりくみ、1990年代における聞き取りの失敗後、2000年代に入ってあらためて聞き取りのとりくみ、2008年に刊行した通史『戦争と戦後を生きる』では、聞き取りを活用した。聞き取りは、いわば私の第1期・第2期・第3期にわたるとりくみであり、オーラル・ヒストリーの本をまとめることには、私自身の研究の総括と新たなチャレンジの両面を感じていた。

2017年に『語る歴史、聞く歴史』を発刊した⁵¹⁾。この本は、幕末維新期から現在に至る「語る歴史、聞く歴史」のとりくみを広く見渡すとともに、個々のテキストの読解につとめ、そのうえで私自身の聞き取り経験を振り返ったものであった。この本で私は、文字史料による歴史学のアプローチと聞き取りによる歴史学のアプローチの相違と共通性を考え、とくに聞き取りにおける身体的・対面的側面の意味と特徴について深く掘り下げようとした。そのなかで、

50) 大門正克『Jr.日本の歴史7 国際社会と日本』小学館、2011年。

51) 大門正克『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波新書、2017年。

47) 大門正克「「生存」の歴史をつなぎ直す——分断を越える道を探る」前掲、『「生存」の歴史と復興の現在』所収。

48) 大門正克「「書くこと」から見える学びの風景——日本近現代史の三つの場面から」『歴博』第145号、2007年、大門正克「写真にみる戦後日本の引き揚げ」『歴博』第164号、2010年、大門正克「歴史のなかの個人の行為に目をこらし、関係を再考する」『西洋史学』第251号、2013年、大門正克「史料読解」をめぐる断章——岡山地方史研究会の合評会に参加して」『岡山地方史研究』第134号、2014年、など。

49) 『歴史学研究』第912号～第914号、2013年11月～2014年1月。

「語る歴史のなかでは、時間にそって経験があるのではなく、経験のなかで時間がつながり合っていた」という認識をもち、人びとは、「経験を軸にして生をつなぐ生活実践」を重ねていることを受けとめるに至った⁵²⁾。

(2) 現在からの検証

すでに述べたように、2008年に「[生存]の歴史学」を提起した際に、第1期の研究を十分に継承できず、研究の飛躍感があった。今回の同時代史的検証をふまえるとき、次の2つに思い至る。1つは、労働と生活は私のなかでほぼ一貫して重視してきた視点だったことである。今回、第1期の『近代日本と農村社会』、第2期の『民衆の教育経験』、第3期の「[生存]の歴史学」のいずれでも、労働と生活の視点を重視してきたことを再確認した。とはいえ、労働と生活は継続して考えてきたはずであるが、飛躍感があったことになり、そのこともまた第2期の紛れもない私の認識であった。

今回の同時代史的検証を通じて確認できたことは、第2期の試行錯誤のもつ意味である。新自由主義の時代と認識論の隆盛のなかで、私は時代と歴史学のありかたの再考を重ね、行きつ戻りつしながら認識を進めようとした。この試行錯誤のなかで、労働と生活に視点をおいた自分の研究の方向性が見えにくくなる時期があり、その試行錯誤の時期から、「[生存]の歴史学」の提起であらためて労働と生活の視点を再獲得するに至る。この試行錯誤の過程は、意味がなかったのでは決してなく、この過程をへることで初めて、「[生存]の歴史学」の提起に至ったこと、加えて今回の同時代史的検証を通じて試行錯誤の過程の意味も鮮明になった。

4 同時代史的検証と自問をふまえ、私の研究を振り返る

最後に、同時代史的検証と自問をふまえ、私の研究全体を振り返ると、その特徴は以下の5

点に整理できる。

第1に、現代的関心と歴史研究の関係把握につとめ、全体把握への関心をもってきた。これは3つの時期を一貫する問題関心であった。第2に、1990年代以降の時代状況をどのように受けとめるかに腐心してきた。新自由主義、グローバル化、歴史批評、認識論の関係把握をめぐる多くの時間を費やしてきた。新自由主義に抗する研究の根拠地を探る問題関心も強くもってきた。第3に、とくに第2期以降、反芻・更新の試行錯誤と思考過程を重ねるようになり、ここに議論の推進力をかけようとしてきた。とらえ返す、時間の重層性、東アジアの空間認識、相互規定性など、相互規定的、矛盾的な認識把握による議論を進めようとしてしてきた。以上の第2と第3の特徴は、『歴史への問い／現在への問い』に刻まれている。第4に、構造と主体の相互関係を考え続けるなかで、あらためて全体把握の方法について考えてきた。歴史認識論争以降、構造と主体、統合と経験の相互関係、動的関係を考え続けてきている。第5は、史料の選定と読解につとめてきたことである。

以上の痕跡は、『民衆の教育経験』『戦争と戦後を生きる』『語る歴史、聞く歴史』などの本のなかに刻まれており、このなかで私は、「経験」から「生存」へと議論の拡張をはかってきた。

研究方法についてもあらためて整理しておきたい。私の研究では、反芻・更新の思考方法に心がけてきた。視座として、統合論的アプローチから「経験」の歴史学、「[生存]の歴史学」へとたどってきた。全体把握への関心を持ち続け、『近代日本と農村社会』における国家と社会の関連把握(3領域)、『生きる』2冊、「[生存]の歴史学」、『戦争と戦後を生きる』は、いずれも全体把握をめざした仕事であった。今回、それぞれの時期に試行錯誤と思考の反芻・更新があり、『戦争と戦後を生きる』では、地域史に即した視野の拡大と研究の拡張をはかり、アジアにおける日本の戦争を含めた戦前・戦時と戦後の往還過程を通史として叙述する試みを行ったことを確認した。

52) 同前、122頁、242～243頁。

おわりに

定年を機に私はあらためて時代と研究に向き合い、同時代史的検証を試みるなかで、自分の研究を振り返る同時代史的検証と自問の必要性を再度自覚した。今回の作業自身が反芻・更新の過程にほかならず、同時代史的検証に加えて、思考の反芻・更新についても、その必要性をあらためて自覚した。

最後に、今後の私の研究について、少しだけふれておく。定年を迎えたり、60歳代や70歳代になったりした研究者が、それまでの自分の研究をまとめ、集大成を試みることによく接する。人生の晩節を迎えるなかでの研究の区切りである。私もまた、たとえば「生存」の歴史学の集大成を行うことを構想したことがあった。しかし、そもそも「生存」の歴史学は、歴

史と現在のたえざる往還のなかで歴史認識を深めて叙述を試みるものであり、集大成をめざすものではなく、たえず反芻・更新されるべきものだと思直すようになった。

前述のように、「生存」の歴史学の反芻・更新のためには、個別の研究の深化が不可欠である。と同時に個別の研究は、大きな歴史と小さな歴史の相互関係のなかでこそ、その歴史的意义が深められる。その過程では歴史批評も欠かせないだろう。現在の私は、「生存」の歴史学の集大成ではなく、反芻・更新をはかること、思考の反芻・更新は個別の事例研究にとどまらず、大きな歴史や歴史批評と結びつくものであること、このような作業を通じて私は、歴史の全体把握にあらためて挑んでみたいと思っている。

(横浜国立大学名誉教授)